

映像メディアで使用される言語の変化 — 英語学習者に対する影響 —

轟 里 香*

On Changes in the Language Used by the Visual Media — Influences on English Learners —

Rika Todoroki *

Received October 31, 2007

Abstract

This paper clarifies changes in the language used in the visual media in Japan, especially in TV news programs, and considers what kind of influence they may have on students studying foreign languages, such as English. It is widely known by researchers that the linguistic environment is very important when a child acquires the first language. However, the linguistic environment can have an influence after the first language acquisition is over. In this point, the visual media play an important role. We are exposed to the language used in the media daily and it can have a considerable influence on our language function. This paper shows that there are three profound changes in the language used in the visual media in Japan and how these changes can influence people studying English as their second language.

1. 導入

本論文は、映像メディアとしてのテレビ、特にいわゆる報道番組で用いられている言語の変化を明らかにし、それが英語等の外国語学習者にどのような影響を及ぼす可能性があるかを考察する。

子供が言語を習得する際には、その言語的環境が極めて重要であることは、言語研究者によって広く知られている。このことは、成長してからの言語についても当てはまると考えられる。この点で、映像メディアの果たす役割は非常に大きい。メディアは我々が日常的に接するものであり、そこで用いられている言語は我々の言語機能に大きな影響を及ぼすと考えられる。

本論文では、近年映像メディアにおいて顕著に見られる現象として、体言止めあるいは助詞の省略¹⁾ (以降、体言止め・助詞の省略と表記する)、動詞的要素の省略、要点の後置・省略を

* 教育能力開発センター
Center of Development for Education

取り上げ、例を挙げて指摘する。これらを踏まえ、映像メディアで用いられている言語の変化が英語学習者にどのような影響を及ぼす可能性があるかを考察する。

2. 体言止め・助詞の省略

この節では、近年の映像メディアにおいて非常に目立つようになった体言止め・助詞の省略を取り上げる。まず、実際に出現した例を挙げよう²⁾。

(1)

- a. 時刻, 7時を回っています。
- b. お盆を過ぎても続く厳しい残暑。
- c. 東京電力では午前中から電力の需要がぐんぐん増加。
- d. 停止していた栃木県の水力発電所を緊急に稼働。
- e. 結局昨日の最大の電力需要は6147万キロワット。
- f. 地震発生から一週間。
- g. 民主党の輿石参議院議員会長, 昨夜NHKのニュース番組で、「小沢代表一人が延長反対と言っているのではない, (筆者による中略)」と述べ, 党内で異論があっても延長反対でまとめたいという考えを示しました。
- h. 光化学スモッグの主な原因となる化学物質オキシダント, インターネットで濃度の予測データの公開が始まりました。 (「おはよう日本」NHK, 2007年8月23日放送)³⁾

報道関係では従来新聞記事の見出しなどで用いられてきた体言止め・助詞の省略が、映像メディアで頻出するようになってきている。約2年前の同番組 (「おはよう日本」NHK, 2005年2月18日放送) と比較すると、2年前の番組では、体言止め・助詞の省略は皆無ではないものの、非常に少ない。これに比べて、現在は枚挙に暇がないほど生じている。ここに挙げた例はほんの一部である。このことから、NHKの報道番組に限ると、体言止め・助詞の省略の劇的な増加は、早くともここ1、2年の間に生じたことが分かる。

その他の番組でも、類似の表現が多数見られる。以下に、NHKの別の番組と民間放送の番組からの例を挙げる。

(2)

- a. 23日ぶりに姿を見せた朝青龍。
- b. チャイナエアラインの旅客機が炎上した事故。
- c. 警視庁の巡査長が女性を拳銃で殺害し自殺したと見られる事件。
- d. 警視庁立川警察署の巡査長, 友野秀和容疑者。
- e. 交番勤務を抜け出して犯行に及んだ友野巡査長。
- f. 三越と伊勢丹。長い歴史を持つデパート同士の経営統合が正式に決まりました。
- g. 右主翼の燃料タンク, ボルトが突き刺さっていました。

(「ニュース7」NHK, 2007年8月23日放送)

(3)

- a. 精神的に不安定な状態が続くとされる朝青龍。
- b. 昨日午後11時前。興奮覚めやらぬ人々。
- c. 特待生ゼロの野球部の強さ。
- d. 家庭内暴力の相談中にセクハラ。県警の警部が処分されていたことが分かりました。

(「イブニング5」TBS, 2007年8月23日放送)

(4)

- a. 朝青龍帰国問題, 大きく揺れ動いています。
- b. 昨日夜診察のため外出した朝青龍。
- c. 毎日違う職場に通うこの男性。 (「イブニングニュース」TBS, 2007年8月23日放送)

このように、体言止め・助詞の省略が、映像メディアで非常に多く見られるようになってきている。このような言語的变化は、事実をできるだけ客観的に伝えるというより、脚色して伝えるという、報道の姿勢における変化の現われではないかと考えられる。加来(2007)は次のように述べている。「ワイドショーが硬派な政治問題や国際情勢なども扱うようになり、脱芸能化も果たした。逆に、ニュース番組には娯楽要素が盛り込まれ、両者の境界はどんどんあいまいになってきている。」

この、ニュース番組が娯楽的ないわゆる「ワイドショー」の要素を盛り込むようになったということは、言語以外の面での変化にも表れている。例えば、映像面では、写真を徐々にアップしていくなど、特殊な効果を出すことを狙った、ドラマや映画的な手法がニュース番組でも頻繁に取り入れられている。

また、プログラムの構成の面では、番組中で主なニュースの区切りごとに出演者同士が感想を述べ合うような場面が挿入される。この手法は、約2年前の番組(「おはよう日本」NHK, 2005年2月18日放送)ではほとんどないし、約33年前の番組(「ニュースセンター9時」NHK, 1974年4月1日放送)では、全く使われていない。

上に述べたような、娯楽番組的な手法は、それ自体は最近生じたものではない。例えば、NHK「スタジオ102」(1965年10月23日放送)では、出演者同士が顔を見合わせて感想を述べ合うような場面がしばしばあった。この番組は、午前7時25分から8時まで放送されたものであり、その直前の午前7時から7時25分までは「ニュース」であったことが確認できる。これらの二つの番組が放送された午前7時から8時までの時間帯は、現在のNHKでは「おはよう日本」という一つの番組が放送されている時間帯である。1965年には「ニュース」(報道)と「スタジオ102」(娯乐的な要素のある番組と推測される)の二つの番組が放送されていた時間帯が、現在「おはよう日本」という一つの番組になっているということは、ニュース番組と娯乐的な番組の両者の境界が不明瞭になってきていることを示していると言える。これにより、従来のニュースにあたる部分が次第に娯乐的に脚色されるようになってきていると考えられる⁴⁾。

言語的な面での手法、すなわち体言止め・助詞の省略に関しても、その手法自体は最近できたものではなく、古くから存在している。報道においても、先に述べたように、以前から新聞

記事の見出しの特徴であった⁵⁾。映像メディアの報道においても、スポーツニュースではかなり前からこの傾向があったと考えられる。約33年前のニュース番組においても、スポーツニュースのコーナーでは体言止めが確認された。

(5)

- a. 選抜高校野球は早くも5日目。
- b. 叫んだり、踊ったり、そして涙するアルプススタンド。

(「ニュースセンター9時」NHK, 1974年4月1日放送)

以前はスポーツ関係に限られていたこの傾向が、ニュース番組に娯楽要素が盛り込まれるようになるとともに、あらゆるジャンルのニュースに広がったと考えられる。

このように、体言止め・助詞の省略は、現在映像メディアにおいて非常に顕著な現象である。しかし、映像メディアで使用されている言語の変化はこれにとどまらない。言語的にはもっと重大と言えるような変化が生じている。次節ではこの点を取り上げる。

3. 動詞的要素の省略

影山(1999)によれば、動詞的概念を形態的に明示する必要があるかどうかに関し、英語と日本語には相違がある。この点を示すものとして、影山は動詞から名詞への転換を例として挙げる。転換とは、元の形態はそのまま品詞だけを変える操作である⁶⁾。英語では、形態を変えずに名詞を動詞としても用いるということが頻繁に生じる。影山が英語における動詞から名詞への転換の例として扱っている単語の中から、以下の(6)では、*butter*というよく知られている単語を挙げてある。(7)は*butter*を動詞として用いている例である。

- (6) *butter* 名詞：バター
動詞：バターをぬる

(7) She buttered four thick slices of bread. (*Oxford Advanced Learner's Dictionary* 2000)

これに対し、日本語では、形態を変えずに名詞を動詞としても用いるということはむしろかしい。名詞「バター」に屈折語尾をつけて動詞として使おうとすると、不適格な文になる。

- (8) a. *彼女は4枚のパンにバターった。
- b. 彼女は4枚のパンにバターをぬった。

(8)が示すように、日本語ではぬるという動詞的概念を「ぬる」という動詞として形態的に明示しなければならない。このようなことから、影山は次のように結論付けている。

- (9) (日本語は)動詞概念をそのまま形態的に明示する必要がある。一方、英語は動詞的な概念を明確な形で表現しなくても済ませられる言語である。(影山 1999: 93)

ところが、近年、映像メディアにおいて、これに反するように見える例が出現している。

- (10) 逆転有罪判決です。 (cf. 逆転有罪判決が出ました)
(「ニュース7」NHK, 2006年3月6日放送)
- (11) 日本航空の機内食でアメリカ産牛肉です。
(cf. 日本航空の機内食でアメリカ産牛肉が出されました)
(「ニュース7」NHK, 2006年3月10日放送)
- (12) 選挙の取り組みが本格化です。(cf. 選挙の取り組みが本格化しています)
(「ニュース7」NHK, 2007年7月5日放送)

(10) から (12) の例では、それぞれ括弧中の下線部にあたる概念が形態的に明示されていない。このような表現を前述の (6) の例「バター」にあてはめると、名詞「バター」に屈折語尾「る」をつけるのではなく、「パンにバターです」のように、名詞の後に「です」を置いて文を終わらせることによって、動詞概念「ぬる」を省略していることになる。このように、従来日本語では明示される必要があると言われてきた動詞概念が、形態的に示されずに省略されている表現が、映像メディアにおいて急激に増加している。この変化はどのように解釈できるのであろうか。

影山の述べるように、日本語が動詞概念を形態的に明示する必要があるのに対し、英語は動詞的な概念を明確な形で表現しなくても済ませられる言語であるとするなら、上のようなメディアにおける日本語の変化は、一見英語化していることの現れだというように受け取れる。しかし、実際は、問題はそれほど単純ではない。なぜなら、メディアの言語の重要な変化の第三点として、文の重要な要素を省略して後述するということがあるからである。次節では、その点について取り上げる。

4. 要点の後置・省略

近年、映像メディアでは、最も重要な要素を後ろに回す表現が非常に目立つようになった。次の (13 a, b) では、より重要な要素である文が第二文として置かれている。

- (13) a. 国内最大の百貨店グループが誕生します。大手百貨店の三越と伊勢丹は、来年4月に経営統合することを正式に発表しました。
- b. 夢の電池登場となるのでしょうか。バイオ電池なるものが開発されました。
(「イブニングニュース」TBS, 2007年8月23日放送)

(14) は4つの文からなっているが、最も重要な要素である文が後置されている。

- (14) 県特産物を守ろうとみんなが力を合わせます。農協や農家が結成したパトロール隊。守ろうとしているのは秋の味覚20世紀梨です。鳥取県佐治町では、毎年収穫直前の梨が盗

まれていることから、今年パトロール隊を結成しました。

(「ニュース7」NHK, 2007年8月23日放送)

(14) の例では、最も重要な要素である「鳥取県佐治町では、毎年収穫直前の梨が盗まれていることから、今年パトロール隊を結成しました。」が最後に置かれているのである。

従来、新聞記事など報道に関わる言語においては、要点を最初にもってこなければならぬといわれてきた。例えば、日本語の新聞記事を英語に翻訳する際の注意点について論じている根岸(1999)は、最も重要な要素をアタマに置かなければならぬと述べている。一言で言えば、「重点先行」ということになる。近年の映像メディアでは、しばしば「重点先行」ならぬ「重点後行」になっていることが多い。

時には、要点のみならず、統語的に必須の要素さえ、後ろに回されている場合もある。

(15) 予告なしに現れました。(主語がなく、「〇〇は」は後で述べられる)

(「ニュース7」NHK, 2007年10月2日放送)

(16) のように、統語的に必須の要素が後ろにさえ現れず、完全に省略されてしまう場合もある。

(16) 安倍総理大臣は。(ここで途切れ、安倍総理大臣の発話が流される。)

(「ニュースウォッチ9」NHK, 2007年7月9日放送)

(16) のような例は最近非常によく見られる。統語的には「安倍総理大臣は次のように述べました。」等と言うべきところを、述部が完全に省略されるのである。(17) も同様に述部が省略された例である。

(17) モンゴル帰国は。協会の判断に注目が集まっています。

(「ニュース7」NHK, 2007年8月23日放送)

言語には統語的に様々な制約がある。例えば、Chomsky(1981)で提案された θ 基準によって、項と θ 役割は一対一対応の関係になければならず、いかなる項にも付与されない θ 役割が存在することは禁じられている。映像メディアではこのような θ 基準などの統語的条件がしばしば破られているということになる。文学的な作品では、統語的な規則をあえて破ることによって生じる違和感を効果として利用する場合があるが、近年の映像メディアにおいて統語的な規則をしばしば破っているのは、このような効果を目的としている可能性もある。そのように考えると、統語的な規則を破ることも、2節で述べた、ニュースを娯楽的に脚色するという傾向と関連があることになる。

5. 外国語学習者に対する影響の可能性

前節までで述べた映像メディアにおける変化は、日本語という言語の存立という点でも議論されるべき重要な問題であるが、この節では、第二言語として英語を学習する際の影響という点に議論を絞り、その可能性について考える。

子供が第一言語（母語）を習得する際、その言語的環境は極めて重要である⁷⁾が、第一言語を習得してからの言語も環境から影響を受ける。このことは、第二言語の習得に関して指摘されている (Larsen-Freeman and Long 1991)。しかし、第二言語のみならず、すでに習得された第一言語も、環境から影響を受ける。これに関し、殊に、映像メディアの果たす役割は非常に大きい。そこで用いられる流行語や特殊なイントネーションが非常に短期間で全国的に広まることも、その言語的な影響力の大きさを示している。

次の例は、本論文で指摘した、最近の映像メディアで使用されている言語の変化が、子供の言語に影響を及ぼしていることをうかがわせる。

(18) 明日はホームラン。よろしくお祈いします。

(「週間ニュース」NHK, 2007年8月4日放送)

(18) は、中学生が野球の松井秀喜選手に対して述べた発話であるが、「明日はホームランを打ってください」または「明日はホームランを期待しています⁸⁾」などの下線部が省略されている。これが映像メディアの言語による影響の結果とは断言はできないが、関連がある可能性は高いと思われる。(18) の発話自体、映像メディアで流されたものである。

それでは、すでに習得された第一言語が環境（映像メディアにおける言語の変化）から影響を受けることは、第二言語の習得に対しどのような影響を及ぼすのであろうか。以下では、英語学習者にどのような影響を及ぼす可能性があるかを考察する。

まず、文の単位で考えてみよう。英語は主要部先端型の言語であるとよく言われる。つまり、句の中心となる要素（主要部）が句の先端に来る。これに対し、日本語は主要部末端言語であり、主要部が句の末端に来る。以下にこの日英語の違いを示す例を挙げる。（それぞれの句で、下線部が主要部である。下付きのアルファベットは、かぎかっこの句の範疇を表す。）

(19) a. [VP cross the street]

b. [VP その通りを渡る] (VP=Verb Phrase)

(20) a. [NP letters from John]

b. [NP ジョンからの手紙] (NP=Noun Phrase)

(21) a. [PP from the city]

b. [PP その町から] (PP=Prepositional Phrase)

(22) a. I said [CP that John was honest].

b. 私は [CP ジョンは正直だと] 言った。(C=Complementizer)

このように、日本語と英語では、主要部とそれ以外の要素（非主要部）の位置関係が鏡像関係になっている。簡単に言うと、日本語と英語は修飾関係が逆、ということである。これは、日本語の母語話者が第二言語として英語を学ぶことを困難にする大きな要因の一つとなる。特に、名詞句において非主要部が長い場合、学習者が母語である日本語の主要部末端型に引きずられてしまうことがしばしば観察される。一例として、次の(23)を見てみよう。これは、筆者が実際に使用している、英語学習者のための教科書の単語並べ替え問題である。

(23) 本を読んでいる女の子は私の娘です。

The () () () () my daughter.

1 is 2 reading 3 girl 4 a book (佐藤, 他 2007: 28)

(23) に対する正しい解答では、「本を読んでいる女の子」に対応する英語は *the girl reading a book* となる。ところが、**the reading a book girl* と答えてしまった学習者が多く見られた。(下線部が主要部である。) このように、名詞句で非主要部が長くなる場合、多くの学習者が母語の日本語の主要部末端型に影響されて、英語でも主要部の名詞を句の最後においてしまうという間違いをする⁹⁾。興味深いことに、この名詞句の一部となっている「本を読んでいる」の部分を句として取り出してみると、この部分では正しく *reading a book* と答えており、**a book reading* とはしていない。このことから、英語学習者が特に日本語の主要部末端型に引きずられやすいのは、非主要部が長い名詞句の場合であるように思われる。

以上の点を踏まえて、映像メディアにおける言語変化を考えてみよう。2節で述べたように、映像メディアでは近年、体言止め・助詞の省略が非常に増加している。その中に多く見られるのは次のような例である。

(24) (=1b) お盆を過ぎても続く厳しい残暑。

(cf. 厳しい残暑がお盆を過ぎても続く。)

(25) (=1h) 光化学スモッグの主な原因となる化学物質オキシダント、インターネットで濃度の予測データの公開が始まりました。

(cf. 化学物質オキシダントは光化学スモッグの原因となる。)

(26) (=2a) 23日ぶりに姿を見せた朝青龍。

(cf. 朝青龍は23日ぶりに姿を見せた。)

(27) (=2e) 交番勤務を抜け出して犯行に及んだ友野巡査長。

(cf. 友野巡査長は交番勤務を抜け出して犯行に及んだ。)

(28) (=4b) 昨日夜診察のため外出した朝青龍。

(cf. 朝青龍は昨日夜診察のため外出した。)

これらの例では、名詞を文末（あるいは間をおく箇所）の直前に持ってくるために、その他の要素をすべて名詞の前に集めており、結果として長い修飾語句を伴う名詞句ができています。

これらの名詞句では、日本語の主要部末端の型に従って、主要部の名詞が句の末端に来ることになる。英語学習者が特に名詞句において英語の主要部の位置（句の先端）を習得することに困難を覚えていることを考えると、映像メディアで頻出する主要部末端型の名詞句にさらされることは、英語学習者にとって大きな障壁となることが考えられる。

次にテキストの単位で見てみよう。最も影響が大きいと思われるのは、4節で述べた「要点の後置・省略」という現象である。英語は、テキストの単位でみても、最も重要な点が先行することが多い。たとえば、パラグラフを書く場合も、そのパラグラフで述べる要点を示すトピックセンテンス（主題文）はパラグラフの最初におくことが推奨される。口頭での発表においても、例えばプレゼンテーションの仕方を解説した藤沢（2002）では、要点を先に述べることによって聞き手の情報処理がスムーズに進むようにすることを勧めている。これに対し、近年の映像メディアでは、いわゆるニュース番組においてさえ、重要な点を後置する、場合によっては省略してしまうという強い傾向が見て取れる。これに接していることが、英語学習者に大きな影響を及ぼすことは十分考えられる。また、英語においてのみならず、重点先行型の文章は世界的な標準となってきたので、第一言語・第二言語を問わず話したり文章を書いたりすること自体への影響も、大変気になるところである。

6. 結論

本論文では、映像メディア、特に、いわゆるニュース番組で用いられている言語の変化を示した。ここで指摘した映像メディアにおける言語の変化には、従来日本語という言語の本質的な特徴とされていた部分に関わるもの（「動詞的要素の省略」）も含まれており、日本語の存立という点でも議論の必要がある問題だが、この論文では、外国語学習者への影響という点に限って考察した。

外国語学習者への影響という点で一番問題なのは、映像メディアで重点が後ろに回されることであろう。しかも、統語的に必須の要素までも後ろに回されるということは、重点先行型の英語を学習するに際してきわめて深刻な影響を及ぼすと考えられる。

この点で影響が大きいといえるのは、映像メディアの中でも、本論文で扱ったようないわゆる報道番組である。確かに、子供や若者など言語学習者が接する機会が量的に多いのは、娯楽番組のほうかもしれない。しかし、報道番組の影響が大きいといえるのは、そこで使われている言語が公式の場で使われる言語、あるいは論理的な話をする際に使われる言語の見本とみなされるからである。特にNHKで使われている言語は、そのようにみなされる可能性が高く、言語教育に与える影響は非常に大きいといえる。

本論文で扱った、映像メディアで使用される言語の変化、および英語学習者に対するその影響という問題は、今後さらに実証的に議論する必要がある。それについては、別稿にて論じる予定である。

映像メディアにおける言語変化に関連した問題としては、他にも次のようなことを挙げることができる。

・音・句調との関連の問題

本論文で扱った体言止め・助詞の省略、動詞的要素の省略、要点の後置・省略などは、

五七調・七五調などと関連している可能性がある。

- ・ニュース番組の中でシリーズ化されている部分（決まったコーナー）を紹介する際に、省略などが頻出するようである。（「次はタイムズです。」「次は〇〇アナウンサーの一押しスポーツ。」など。）映像メディアで用いられている言語を、新聞の見出しやリードに対応する部分に分けることが可能であると考えられる。その場合、部分によって体言止め・助詞の省略、動詞的要素の省略、要点の後置・省略などが出現する頻度に差があるかどうか調査する必要がある。
- ・映像との関連

映像メディアでの省略の一例として、音声言語としては主語を省いた文を用いながら、同時に主語となる人物を映像で出すことによって、映像を言語の一部のように組み入れている場合がある。これは、多くの若者が、電子メールで文章の一部に絵文字を使うのと類似した現象のようにも見える。しかし、電子メールの場合、文字も絵もともに視覚的な記号であるのに対し、映像メディアでは、映像（視覚的記号）と言語（音声記号）を混在させることになり、障害者への配慮という点が問題となる。

これらの問題に関しても別稿にて議論する予定である。

註

* 本論文は2007年度北陸大学特別研究助成を受けている。

- 1) ここで体言止めあるいは助詞の省略として扱っているのは、発話において間がおかれる直前が名詞で終わっているものである。発話に出てくるある表現が体言止めかあるいは助詞の省略なのかを区別するためには、それぞれを厳密に定義する必要がある。小論では、これら二つを類似した現象として扱っているため、ここでは体言止めと助詞の省略を明確には区別せず、まとめて「体言止め・助詞の省略」として扱うことにする。
- 2) 本論文の議論の基になっている例は、現在に近いものは主に2007年8月23日に放送されたいわゆるニュース番組からとった。これは、同じ題材を扱った複数の番組を比較するため、任意の日付を選んで録画したものである。それ以外の日付に放送された例も適宜扱っている。
- 3) 例文中では、名詞の直後に間がある場合に、助詞が省略されているとみなせるところは読点、それ以外は句点を入れてあるが、註1で述べたように、この区別はここでは厳密なものではないので、議論の余地が残されている。
- 4) 村松（2005）はニュース番組のキャスター同士の会話を分析している。それによれば、分析対象としたキャスター同士の会話のほとんどすべてが、放送されたニュース・話題に関連していた。村松はこれを、アメリカのニュース番組とは大きく異なる点であると指摘し、CNNなどでは、前後のニュースと無関係な会話（プライベートな会話）をすると述べている。
- 5) 言うまでもなく、新聞の見出しで「体言止め・助詞の省略」が用いられるのは、字を書くスペースが限られているという物理的な理由のためである。
- 6) この操作をゼロの派生接辞をつけて品詞を変えていると捉えて、ゼロ派生と呼ぶこともある。
- 7) 第一言語習得に関しては、経験論的な立場をとるか合理論的な立場をとるかで、言語的な環境が果たす役割も異なる。しかしながら、言語的な環境が言語習得の上で重要な役割を果たすという点では、大方の意見は一致している。
- 8) 「明日はホームランを期待しています」でも主語の「私は」は省略されているが、これは従来から日本語として自然なこととされているものであり、統語論ではゼロの代名詞形が存在するものとして扱われる。
- 9) 主要部先端型の英語でも、名詞を修飾する形容詞句は名詞の前に来る (*a very beautiful girl*) が、これは例外的なこととみなされている。このことが、名詞句に関し学習者をいっそう混乱させるのかもしれない。

参考文献

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- 藤沢晃治 (2002) 『「分かりやすい説明」の技術』講談社。
- 原口庄輔, 中村捷編 (1992) 『チョムスキー理論辞典』研究社。
- 影山太郎 (1999) 「形態論とレキシコン」西光義弘編『日英語対照による英語学概論』47-96, くろしお出版。
- 加来由子 (2007) 「午後のワイドショー消え行く東京」朝日新聞2007年9月19日23面。
- Larsen-Freeman, Diane and Michael H. Long (1991) *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. Longman. (牧野高吉, 萬谷隆一, 大場浩正訳『第2言語習得への招待』鷹書房弓プレス。)
- 村松賢一 (2005) 「ニュース番組における『おしゃべり』」三宅和子, 岡本能里子, 佐藤彰編『メディアとことば2』2-29, ひつじ書房。
- 根岸裕一 (1999) 『新聞記事翻訳の現場から 和英翻訳ハンドブック』大修館書店。
- 大喜多喜夫 (2000) 『英語教員のための応用言語学—ことばはどのように学習されるか—』昭和堂。
- 佐藤哲三, 愛甲ゆかり, 新藤照夫 (2007) 『基本から始める英語再入門』南雲堂。